

「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味的相違

渡 邊 ゆかり

1. 研究の目的

次の(1a)と(1b)は、いずれも、「靴」が誰かが脱いだ後の状態にあり続けていることを表している。

- (1) a. 靴が脱いだままだ。
- b. 靴が脱ぎっぱなしだ。

このように「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文は、同一の知的意味を有する場合があるが、常に同一の知的意味を有するものとして解釈されるわけではない。次の(2)のように異なる知的意味を有するものとして解釈される場合も存在する。

- (2) a. 洗濯物が落ちたままだ。
- b. 洗濯物が落ちっぱなしだ。

(2a)、(2b)は、共に「洗濯物」が「落ちる」という変化の終了により発生した状態にあり続けていることを表しているが、(2b)は、これ以外に「洗濯物が落ちる」という事態が何度も繰り返し生じていることを表していると解釈することも可能である。

また、次の(3)、(4)のように「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文とでは、許容度が異なる場合も存在する。

- (3) a. 部屋が片付いたままだ。
- b. ? 部屋が片付きっぱなしだ。

- (4) a. ? CD が聞いたままだ。
b. CD が聞きっぱなしだ。

しかしながら、稿者の管見する限りでは、(1)－(4)のような言語事実が存在する理由について説明を行っている先行研究は存在しない。従って、本稿においては、「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味的相違を分析、考察することによって(1)－(4)のような言語事実の存在理由を明らかにすることを目的とする。

2. ガ格対応型とヲ格対応型

「動詞の過去形+ままだ」、「動詞の連用形+っぱなしだ」は、「何か」についての状態を表しており、この「何か」、すなわち、「動詞の過去形+ままだ」、「動詞の連用形+っぱなしだ」という形式が表す状態の主体はともにガ格で表される。例えば、(1a)の「脱いだままだ」と(1b)の「脱ぎっぱなしだ」は、ともにガ格が表す「靴」についての状態を表している。

このように「動詞の過去形+ままだ」、「動詞の連用形+っぱなしだ」は、これらの形式が表す状態の主体を表すガ格を補語とするわけであるが、このガ格は、同時に、各々の述語に用いられている動詞の表す動作や運動や変化の主体を表す場合とそうでない場合がある¹⁾。換言すれば、「動詞の過去形+ままだ」述語文、「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文のガ格は、各々の文の述語に使用されている動詞を述語とする文のガ格に対応する場合とそうでない場合がある。このことは、次の(5)、(6)の表現例で確かめることができる。

- (5) a. 太郎はパジャマを着たままだ。 → 太郎がパジャマを着る。
b. 太郎はパジャマを着っぱなしだ。 → 太郎がパジャマを着る。
(6) a. 部屋がちらかしたままだ。 → Xが部屋をちらかす。
b. 部屋がちらかしっぱなしだ。 → Xが部屋をちらかす。

(5)では、「動詞の過去形+ままだ」述語文、「動詞の連用形+っぱなしだ」

1) 本稿においては、特に有情物の動きに対しては「動作」という用語を、非情物の動きに対しては「運動」という用語を用い両者の動きを区別することとする。

述語文のガ格が、各々の文の述語に使用されている動詞を述語とする文のガ格に対応しているのに対し、(6)では、ヲ格に対応している。

従って、このような観点から「動詞の過去形+ままだ」述語文、「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文は、各々の文のガ格が各々の文の述語に使用されている動詞を述語とする文のガ格に対応しているものと、ヲ格に対応しているものとの二つに分類することができる。本稿では、以後、便宜上、前者のタイプの「動詞の過去形+ままだ」述語文、「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文をガ格対応型、後者のタイプの「動詞の過去形+ままだ」述語文、「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文をヲ格対応型とし、論を進めていく。また、「動詞の過去形+ままだ」述語文、「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の述語に使用されている動詞句を示すものとして、動詞句という記号を使用する。さらに、ガ格が表すモノを示すものとしては‘ガ格’という記号を、ヲ格が表すモノを示すものとしては‘ヲ格’という記号を、動詞句の表す動作、運動、変化を示すものとしては‘V’という記号を使用することとする。

3. 「動詞の過去形+ままだ」述語文

3.1 ガ格対応型

ガ格対応型の「動詞の過去形+ままだ」述語文には次の(7)－(15)のようなものがあるが、動詞句の意味により文意は異なる。

- (7) 太郎は自転車をこいだままだ。
- (8) 太郎は麺をゆがいたままだ。
- (9) 太郎は顔を洗ったままだ。
- (10) 太郎はマイクをつけたままだ。
- (11) 太郎はテレビをつけたままだ。
- (12) ボールがはねたままだ。
- (13) 機体が上昇したままだ。
- (14) 赤字が膨らんだままだ。
- (15) 歩行者信号が青に変わったままだ。

まず、(7)－(9)と(12)、(13)であるが、(7)－(9)と(12)、(13)は、‘ガ格’が‘V’を持続していることを表していると解釈することができる。例えば、(7)は、「太郎」が「自転車をこぐ」という動作を持続していることを表して

いると解釈することができる。また、(12)は、「ボール」が「はねる」という運動を持続していることを表していると解釈することができる。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が、限界点の存在しない‘ガ格’の動作か、もしくは、運動を表しているという条件をあげることができる²⁾。従って、(14)や次の(16)のように、動詞句が‘ガ格’の変化は表しているが、‘ガ格’の動作や運動は表していない場合は、限界点が存在しない変化であってもこの解釈は成立しない。

(16) ダムの水位が上がったままだ。

以下、便宜上、このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味1とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味1

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：少なくとも次の①、②のいずれか一つを表す

① 限界点の存在しない‘ガ格’の動作

② 限界点の存在しない‘ガ格’の運動

文 意：‘ガ格’が‘V’を持続している

次に、(7)－(9)であるが、(7)－(9)は、‘ガ格’が‘V’開始後、次に行う可能性のある動作をしていないことを表していると解釈することが可能である。例えば、(7)は、「太郎」が「自転車をこぐ」という動作開始後、次に行う可能性のある動作、例えば、「皿を回す」といった動作をしていないことを表していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が限界点の存在しない‘ガ格’の動作を表しているという条件をあげることができる。以下、便宜上、このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味2とする。

2) 限界点の存在する動作とは、「テレビをつける」のように、ある状態が発生した時点で自動的に終了してしまう動作のことをいう。これ以外の動作は、限界点の存在しない動作とみなす。限界点の存在する運動、限界点の存在する変化についても同様の解釈を適用することとする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味2

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：限界点の存在しない‘ガ格’の動作

文 意：‘ガ格’が‘V’開始後、次に行う可能性のある動作をしていない

次に、(12)、(13)であるが、(12)、(13)は、‘ガ格’が‘V’開始後、次に行う可能性のある運動、もしくは、次にかかる可能性のある変化をしていないことを表していると解釈することができる。例えば、(12)は、手品ショーか何かで「ボール」が「はねる」という運動開始後、次にかかる可能性のある変化、例えば、「赤色に変色する」といった変化をしていないことを表していると解釈することができる。また、(13)は、自衛隊の飛行訓練か何かで「機体」が「上昇する」という運動開始後、次に行う可能性のある運動、例えば、「回転する」といった運動をしていないことを表していると解釈することができる。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が限界点の存在しない運動を表しているという条件をあげることができる。以下、便宜上、このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味3とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味3

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：限界点の存在しない‘ガ格’の運動

文 意：‘ガ格’が‘V’開始後、次に行う可能性のある運動、もしくは、次にかかる可能性のある変化をしていない

次に、(9)、(10)と(13)－(15)であるが、(9)、(10)と(13)－(15)は、‘ガ格’が‘V’終了により発生した状態にあり続けていることを表していると解釈することが可能である。例えば、(9)の「動詞の過去形+ままだ」述語文は、「太郎」が「顔を洗う」という動作の終了により発生した状態にあり続けていることを表していると解釈することができる。また、例えば、(13)は、「機体」が「上昇する」という変化の終了により発生した状態にあり続けていることを表していると解釈することができる。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が‘ガ格’が‘ガ格’を変化させる動作、もしくは、‘ガ格’の変化を表しているという条件をあげることができる。以下、便宜

上、このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味4とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味4

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：少なくとも次の①，②のいずれか一つを表す

① ‘ガ格’が‘ガ格’を変化させる動作

② ‘ガ格’の変化

文 意：‘ガ格’が‘V’終了により発生した状態にあり続けている

次に、(8)－(11)であるが、(8)－(11)は、‘ガ格’が‘ヲ格’を‘V’終了により発生した状態にし続けていることを表していると解釈することが可能である。例えば、(8)は、「太郎」が「麺」を「ゆがく」という動作の終了により発生した状態にし続けていることを表していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が‘ガ格’が‘ヲ格’を変化させる動作を表しているという条件をあげることができる。以下、便宜上、このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味5とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味5

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：‘ガ格’が‘ヲ格’を変化させる動作

文 意：‘ガ格’が‘ヲ格’を‘V’終了により発生した状態にし続けている

次に、同じく(8)－(11)であるが、(8)－(11)は、‘ガ格’が、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味4、もしくは、意味5が表す状況のもとで、‘V’の次に行う可能性のある何らかの動作をしていないことを表していると解釈することが可能である。例えば、(8)は、「太郎」が、「麺」を「ゆがく」という動作の終了により発生した状態にし続けているという状況のもとで、「麺をゆがく」という動作の次に行う可能性のある動作、例えば、「スープを作る」といった動作をしていないことを表していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が、‘ガ格’が‘ガ格’か‘ヲ格’のうち少なくともいずれか一つを変化させる動作を表しているという条件をあげることができる。以下、便宜上、このような意味を

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味6とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味6

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：少なくとも次の①、②のいずれか一つを表す

① ‘ガ格’が‘ガ格’を変化させる動作

② ‘ガ格’が‘ヲ格’を変化させる動作

文 意：‘ガ格’が、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味4、もしくは、意味5が表す状況のもとで、‘V’の次に行う可能性のある動作をしていない

次に、(13)－(15)であるが、(13)－(15)は、‘ガ格’が、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味4が表す状況のもとで、‘V’の次に行う可能性のある運動、もしくは、‘V’の次に起る可能性のある変化をしていないことを表していると解釈することが可能である。例えば、(15)は、「歩行者信号」が、「青に変わる」という変化の終了により発生した状態にあり続けているという状況のもとで、「青に変わる」という変化の次に行う可能性のある運動、例えば、「音楽を鳴らす」といった運動をしていないことを表していると解釈することが可能である。また、「歩行者信号」が、「青に変わる」という変化の終了により発生した状態にあり続けているという状況のもとで、「青に変わる」という変化の次に起る可能性のある変化、例えば、「点滅する」といった変化をしていないことを表していると解釈することも可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が‘ガ格’の変化を表しているという条件をあげることができる。以下、便宜上、このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味7とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味7

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：‘ガ格’の変化

文 意：‘ガ格’が、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味4が表す状況のもとで、‘V’の次に行う可能性のある運動、もしくは、‘V’の次に起る可能性のある変化をしていない

3.2 ヲ格対応型

ヲ格対応型の「動詞の過去形+ままだ」述語文には次の (17) - (19) のようなものがあり、これらには、二つの解釈が存在する。

(17) ラジオがつけたままだ。

(18) 窓が開けたままだ。

(19) 鞆が机の上に置いたままだ。

一つ目の解釈は、‘ガ格’が‘V’終了により発生した状態にあり続けているという解釈である。例えば、(17)は、「ラジオ」が「つける」という動作の終了により発生した状態にあり続けていることを表していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が、何者かが‘ガ格’を変化させる動作を表しているという条件をあげることができる。このような動作を表していない動詞句は、(4a)や次の(20)に示されるようにこのような意味を表す「動詞の過去形+ままだ」述語文にはなじまない。

(20) ?テレビが見たままだ。

以下、便宜上このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味8とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味8

ガ 格：‘V’の対象・述語が表す状態の主体

動詞句：何者かが‘ガ格’を変化させる動作

文 意：‘ガ格’が‘V’終了により発生した状態にあり続けている

二つ目の解釈は、‘ガ格’が、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味8が表す状況のもとで、‘V’の次に行われる可能性のある何者か（‘V’の主体以外の人物の場合も含む）の何らかの動作を受けていないという解釈である。例えば、(17)は、「ラジオ」が、「つける」という動作の終了により発生した状態にあり続けているという状況のもとで、「つける」という動作の次に行われる可能性のある何者か（「つける」という動作の主体以外の人物の場合も含む）の「チャンネルを合わせる」といった動作を受けていないことを表

していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としても、動詞句が、何者かが‘ガ格’を変化させる動作を表しているという条件をあげることができる。以下、便宜上このような意味を「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味9とする。

「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味9

ガ 格：‘V’の対象・述語が表す状態の主体

動詞句：何者かが‘ガ格’を変化させる動作

文 意：‘ガ格’が、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味8が表す状況のもとで、‘V’の次に行われる可能性のある何者か（‘V’の主体以外の人物の場合も含む）の何らかの動作を受けていない

3.3 共時的に見た各々の意味の派生関係³⁾

これまで見てきた「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味を表にまとめると次頁の表1のようになる。

まず、意味1と意味2、意味3であるが、意味2、意味3の表す事態は、意味1が表す事態が成立していることを前提としており、この点において、意味1と意味2、意味3は互いに派生関係にある。

次に、意味4、意味5と意味6であるが、意味6が表す事態は、意味4、もしくは、意味5が表す事態が成立していることを前提としており、この点において、意味4、意味5と意味6は派生関係にある。

次に、意味4と意味7であるが、意味7が表す事態は、意味4が表す事態が成立していることを前提としており、この点において、意味4と意味7は互いに派生関係にある。

次に、意味2と意味3と意味6と意味7であるが、これらは、‘ガ格’が‘V’と何らかの時間的配列関係にある動作、もしくは、運動、もしくは、変化をしていないことを表しているという点において、互いに派生関係にある。

3) 本稿では、意味の派生関係を共時的に考察している。従って、ある意味と別の意味がどのような点で類似しているか、もしくは、関係しているかについては考察しているが、ある意味が通時的に見てどの意味から派生してきたのかということについてまでは考察していない。

表 1

	文意	動詞句の意味
意味 1	‘ガ格’ が ‘V’ を持続している	限界点の存在しない ‘ガ格’ の動作 限界点の存在しない ‘ガ格’ の運動
意味 2	‘ガ格’ が ‘V’ 開始後、次に行う可能性のある動作をしていない	限界点の存在しない ‘ガ格’ の動作
意味 3	‘ガ格’ が ‘V’ 開始後、次に行う可能性のある運動、もしくは、次に起る可能性のある変化をしていない	限界点の存在しない ‘ガ格’ の運動
意味 4	‘ガ格’ が ‘V’ 終了により発生した状態にあり続けている	‘ガ格’ が ‘ガ格’ を変化させる動作 ‘ガ格’ の変化
意味 5	‘ガ格’ が ‘ヲ格’ を ‘V’ 終了により発生した状態にし続けている	‘ガ格’ が ‘ヲ格’ を変化させる動作
意味 6	‘ガ格’ が、意味 4、もしくは、意味 5 が表す状況のもとで、‘V’ の次に行う可能性のある動作をしていない	‘ガ格’ が ‘ガ格’ を変化させる動作 ‘ガ格’ が ‘ヲ格’ を変化させる動作
意味 7	‘ガ格’ が、意味 4 が表す状況のもとで、‘V’ の次に行う可能性のある運動、もしくは、‘V’ の次に起る可能性のある変化をしていない	‘ガ格’ の変化
意味 8	‘ガ格’ が ‘V’ 終了により発生した状態にあり続けている	何者かが ‘ガ格’ を変化させる動作
意味 9	‘ガ格’ が、意味 8 が表す状況のもとで、‘V’ の次に行われる可能性のある何者か（‘V’ の主体以外の人物の場合も含む）の何らかの動作を受けていない	何者かが ‘ガ格’ を変化させる動作

次に、意味 4 と意味 8 であるが、意味 4 と意味 8 は、‘ガ格’ が ‘V’ 終了により発生した状態にあり続けていることを表しているという点において、互いに派生関係にある。

最後に、意味 8 と意味 9 であるが、意味 9 が表す事態は、意味 8 が表す事態が成立していることを前提としており、この点において、意味 8 と意味 9 は派生関係にある。

以上、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味について考察してきたが、次節では、「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味について「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味と比較しながら分析を行う。

4. 「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文

4.1 ガ格対応型

ガ格対応型の「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文には、以下の (21) - (26) のようなものがあるが、動詞句の意味により文意も異なる。

(21) 太郎はマンガを読みっぱなしだ。

(22) 太郎は麺をゆがきっぱなしだ。

- (23) 救急車のサイレンが鳴りっぱなしだ。
 (24) 赤字が膨らみっぱなしだ。
 (25) 太郎はマイクをつけっぱなしだ。
 (26) 太郎はテレビをつけっぱなしだ。

まず、(21)－(24)であるが、(21)－(24)は、いずれも、‘ガ格’が‘V’を、度を超えて持続していることを表していると解釈することができる。例えば、(21)は、「太郎」が「マンガを読む」という動作を、度を超えて持続していることを表していると解釈することができる。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が限界点の存在しない‘ガ格’の動作か運動か変化のうち少なくともいずれか一つを表しているという条件をあげることができる。また、次の(27)－(29)のように、通常持続されることが好まれる傾向にあり、なおかつ、平均的な持続時間というものがないような動作や運動や変化を表す動詞句は、特別な場面設定がない限り、このような意味を表す「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文にはなじまない。

- (27) ?太郎は私との約束を守りっぱなしだ。
 (28) ?ホストコンピュータは正常に稼働しっぱなしだ。
 (29) ?景気は向上しっぱなしだ。

これは、こういった(27)－(29)の動詞句の意味が、‘V’の持続時間が適当な長さを超えているという評価的意味になじまないからである。以下、便宜上、上記の「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味を「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味1とする。

「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味1

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：少なくとも次の①，②，③のいずれか一つを表す

- ① 限界点の存在しない‘ガ格’の動作
- ② 限界点の存在しない‘ガ格’の運動
- ③ 限界点の存在しない‘ガ格’の変化

文 意：‘ガ格’が‘V’を、度を超えて持続している

この「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味1は、‘ガ格’が‘V’を持続していることを表しているという点において「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味1と類似している。しかしながら、後者においては、前者とは異なり、すでに述べたように、限界点の存在しない‘ガ格’の変化を表す動詞句はなじまない (cf. (14), (16))。また、後者においては、‘V’の持続時間が適当な長さを超えているという評価の意味は存在しない。従って、(27) - (29)の許容度が低いのに対し、次の(27') - (29')の許容度は、特別低くはない。

(27') 太郎は私との約束を守ったままだ。

(28') ホストコンピュータは正常に稼働したままだ。

(29') 景気は向上したままだ。

次に、(21) - (26)であるが、(21) - (26)は、‘ガ格’が‘V’を、度を超えて繰り返していることを表していると解釈することが可能である。例えば、(21)は、「太郎」が「マンガを読む」という動作を、度を超えて繰り返していることを表していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が繰り返しの可能な動作、もしくは、運動、もしくは、変化を表しているという条件をあげることができる。従って、次の(30) - (32)のように通常繰り返しが不可能と考えられている動作や運動や変化を表す動詞句はこのような意味を表す「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文にはなじまない。

(30) ? 太郎は中学を中退しっぱなしだ。

(31) ? 戦艦大和が沈没しっぱなしだ。

(32) ? ナウマン象が絶滅しっぱなしだ。

また、次の(33) - (35)のように、通常は繰り返されることが好まれる傾向にあり、なおかつ、一般的な頻度というものがないような変化を表す動詞句は、特別な場面設定がない限り、このような意味を表す「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文にはなじまない。

(33) ? 太郎は私を助けっぱなしだ。(cf. 太郎は私を非難しっぱなしだ。)

(34) ? いい風が入りっぱなしだ。(cf. 雨が降りっぱなしだ。)

(35) ? 部屋が片付きっぱなしだ。(cf. 部屋がちらかりっぱなしだ。)

これは、こういった(33)－(35)の動詞句の意味が、‘V’の頻度が適当な頻度をを超えているという評価的意味になじまないからである。以下、便宜上、上記のような「動詞の連用形＋っぱなしだ」述語文の意味を「動詞の連用形＋っぱなしだ」述語文の意味2とする。

「動詞の連用形＋っぱなしだ」述語文の意味2

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：次の①，②，③のうち少なくともいずれか一つを表す

① 繰り返しが可能な‘ガ格’の動作

② 繰り返しが可能な‘ガ格’の運動

③ 繰り返しが可能な‘ガ格’の変化

文 意：‘ガ格’が‘V’を，度を超えて繰り返している

次に、(24)－(26)であるが、(24)－(26)は、‘ガ格’が度を超えて‘V’終了により発生した状態にあり続けていることを表していると解釈することができる。例えば、(24)は、「赤字」が、度を超えて「膨らむ」という変化の終了により発生した状態にあり続けていることを表していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が‘ガ格’が‘ガ格’を変化させる動作か、もしくは、‘ガ格’の変化を表しているという条件をあげることができる。また、次の(36)，(37)のように通常は動作、もしくは、変化終了により発生した‘ガ格’の状態が持続することが好まれる傾向にあり、なおかつ、動作、もしくは、変化終了により発生した‘ガ格’の状態の平均的な持続時間というものが存在しないような動作や変化を表す動詞句は、特別な場面設定がない限り、このような意味を表す「動詞の連用形＋っぱなしだ」述語文にはなじまない。

(36) ? 太郎は身なりを整えっぱなしだ。(cf. 太郎は服を汚しっぱなしだ。)

(37) ? 空が晴れっぱなしだ。(cf. 空が曇りっぱなしだ。)

これは、こういった(36)，(37)の動詞句の意味が、‘V’終了により発生

した‘ガ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価的意味になじまないからである。以下、便宜上、上記のような「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味を「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味3とする。

「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味3

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：少なくとも次の①か②のいずれか一つを表す

① ‘ガ格’が‘ガ格’を変化させる動作

② ‘ガ格’の変化

文 意：‘ガ格’が度を超えて‘V’終了により発生した状態にあり続けている

この「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味3は、‘ガ格’が‘V’終了により発生した状態にあり続けていることを表しているという点において「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味4と類似している。しかしながら、後者には、‘V’終了により発生した‘ガ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価的意味は存在しない。従って、(36)、(37)の許容度が低いのに対し、次の(36’)、(37’)の許容度は、特別低くはない。

(36’) 太郎は身なりを整えたままだ。

(37’) 空が晴れたままだ。

次に、(25)、(26)であるが、(25)、(26)は、‘ガ格’が‘ヲ格’を、度を超えて‘V’終了により発生した状態にし続けていることを表しているとみなすことができる。例えば、(26)の「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文は、「太郎」が「テレビ」を、度を超えて「つける」という動作の終了により発生した状態にし続けていることを表していると解釈することができる。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が‘ガ格’が‘ヲ格’を変化させる動作を表しているという条件をあげることができる。また、次の(38)のように通常は動作終了により発生した‘ヲ格’の状態が持続することが好まれる傾向にあり、なおかつ、動作終了により発生した‘ヲ格’の状態の平均的な持続時間というものがないような動作を表す動詞句は、特別な場

面設定がない限り、このような意味を表す「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文にはなじまない。

(38) ? 太郎は部屋を片付けっぱなしだ。

(cf. 太郎は部屋をちらかしっぱなしだ。)

これは、こういった(38)の動詞句の意味が、‘V’ 終了により発生した‘ヲ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価の意味になじまないからである。以下、便宜上、上記のような「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味を「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味4 とする。

「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味4

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：‘ガ格’が‘ヲ格’を変化させる動作

文 意：‘ガ格’が‘ヲ格’を，度を超えて‘V’終了により発生した状態にし続けている

この「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味4は、‘ガ格’が‘ヲ格’を‘V’終了により発生した状態にし続けていることを表しているという点においては、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味5と類似している。しかしながら、後者には、前者にあるような‘V’終了により発生した‘ヲ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価の意味は存在しない。従って、(38)の許容度が低いのに対し、次の(38')の許容度は、特別低くはない。

(38') 太郎は部屋を片付けたままだ。

最後に(21)であるが、(21)は、‘ガ格’が‘ヲ格’を，度を超えて‘V’終了時の状態にし続けていることを表していると解釈することができる。すなわち、(21)は、「太郎」が「マンガ」を，度を超えて「読む」という動作終了時の状態にし続けていることを表していると解釈することができる。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が限界点の存在しない‘ガ格’の動作を表しているという条件をあげることができる。また、次の(39)のよ

うに、通常は動作終了後に‘ヲ格’をある特定の状態に変化させることが特に期待されないような動作を表す動詞句は、特別な場面設定がない限り、この意味を表す「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文にはなじまない。

(39) ? 太郎は店の貼紙を読みっぱなしだ。(cf. (21))

これは、こういった(39)の動詞句の意味が‘V’終了時の‘ヲ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価的意味になじまないからである。以下、便宜上、上記のような「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味を「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味5とする。

「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味5

ガ 格：‘V’の主体・述語の表す状態の主体

動詞句：限界点の存在しない‘ガ格’の動作

文 意：‘ガ格’が‘ヲ格’を、度を超えて‘V’終了時の状態にし続けている

4.2 ヲ格対応型

ヲ格対応型の「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文には、以下の(40)－(43)のようなものがあるが、動詞句の意味により文意は異なる。

(40) 部屋がちらかしっぱなしだ。

(41) 洗濯物が干しっぱなしだ。

(42) マンガが読みっぱなしだ。

(43) テレビが見っぱなしだ。

まず、(40)、(41)であるが、(40)、(41)は、‘ガ格’が‘V’の主体により度を超えて‘V’終了により発生した状態にされ続けていることを表していると解釈することが可能である。例えば、(40)は、「部屋」が「ちらかす」という動作の主体により度を超えて「ちらかす」という動作の終了により発生した状態にされ続けていることを表していると解釈することが可能である。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が何者かが‘ガ格’を変化させる動作を表しているという条件をあげることができる。また、次の(44)

のように、通常、動作終了により発生した‘ガ格’の状態が持続することが好まれる傾向にあり、なおかつ、動作終了により発生した‘ガ格’の状態の平均的な持続時間というものが存在しないような動作を表す動詞句は、特別な場面設定がない限り、この意味を表す「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文にはなじまない。

(44) ?部屋が片付けっぱなしだ。(cf. (40))

これは、こういった(44)の動詞句の意味が、‘V’終了により発生した‘ガ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価的意味になじまないからである。以下、便宜上、上記のような「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味を「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味6とする。

「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味6

ガ 格：‘V’の対象・述語の表す状態の主体

動詞句：何者かが‘ガ格’を変化させる動作

文 意：‘ガ格’が‘V’の主体により度を超えて‘V’終了により発生した状態にされ続けている

この「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味6は、‘ガ格’が‘V’終了により発生した状態にあり続けていることを表している点において、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味8と類似している。しかしながら、後者には、‘V’終了により発生した‘ガ格’の状態が持続している原因が、‘V’の主体にあるという意味は存在しない。従って、喫茶店で「コーヒー」を注文したが、いまだに店員が「コーヒー」を運んでこない、すなわち、「コーヒー」が誰かの注文により、注文者のもとに運ばれるべきものという状態に変化した後、その注文者以外の人物の責任によりその状態にされ続けている場合は、次の(45a)は、適当であるが、(45b)は不適當となる。

(45) a. コーヒーが注文したままだ。

b. コーヒーが注文しっぱなしだ。

しかし、「コーヒー」を好きな時に注文者が取りに行くというシステムの

セルフサービスの店で、「コーヒー」を注文した後、注文者が取りに行くのを忘れている、すなわち、注文者が注文という動作の終了により「コーヒー」を「自らが取りにいくべきもの」という状態に変化させた後、自らの責任でその状態にし続けている場合は、(45a)も(45b)も適当である。

また、「動詞の過去形+ままだ」述語文の意味8には、‘V’終了により発生した‘ガ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価の意味は存在しない。従って、(44)の許容度が低いのに対し、次の(44’)の許容度は、特別低くはない。

(44’) 部屋が片付けたままだ。

次に、(42)、(43)であるが、(42)、(43)は、‘ガ格’が‘V’の主体により度を超えて‘V’終了時の状態にされ続けていることを表していると解釈することができる。例えば、(42)は、「マンガ」が「読む」という動作の主体により度を超えて「読む」という動作終了時の状態にされ続けていることを表していると解釈することができる。このような解釈が成立する条件としては、動詞句が、限界点の存在しない何者かの動作を表しているという条件をあげることができる。また、次の(46)のように、通常、動作終了後に‘ガ格’を何らかの特定の状態に変換させることは特に期待されないような動作を表す動詞句は、特別な場面設定がない限り、この意味を表す「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文にはなじまない。

(46) ?猫が見っぱなしだ。(cf. (43))

これは、こういった(46)の動詞句の意味が、‘V’終了時の‘ガ格’の状態の持続時間が適当な長さを超えているという評価の意味になじまないからである。以下、便宜上、上記のような「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味を「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味7とする。

「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味7

ガ 格：‘V’の対象・述語の表す状態の主体

動詞句：限界点の存在しない何者かの動作

文 意：‘ガ格’が‘V’の主体により度を超えて‘V’終了時の状

態にされ続けている

4.3 共時的に見た各々の意味の派生関係

これまで見てきた意味1から意味7までを表にまとめると以下の表2のようになる。

表2

	文意	動詞句の意味
意味1	‘ガ格’が‘V’を、度を超えて持続している	限界点の存在しない‘ガ格’の動作 限界点の存在しない‘ガ格’の運動 限界点の存在しない‘ガ格’の変化
意味2	‘ガ格’が‘V’を、度を超えて繰り返している	繰り返しが可能な‘ガ格’の動作 繰り返しが可能な‘ガ格’の運動 繰り返しが可能な‘ガ格’の変化
意味3	‘ガ格’が度を超えて‘V’終了により発生した状態にあり続けている	‘ガ格’が‘ガ格’を変化させる動作 ‘ガ格’の変化
意味4	‘ガ格’が‘ヲ格’を、度を超えて‘V’終了により発生した状態にあり続けている	‘ガ格’が‘ヲ格’を変化させる動作
意味5	‘ガ格’が‘ヲ格’を、度を超えて‘V’終了時の状態にし続けている	限界点の存在しない‘ガ格’の動作
意味6	‘ガ格’が‘V’の主体により度を超えて‘V’終了により発生した状態にされ続けている	何者かが‘ガ格’を変化させる動作
意味7	‘ガ格’が‘V’の主体により度を超えて‘V’終了時の状態にされ続けている	限界点の存在しない何者かの動作

意味1から意味7までは、いずれも‘ガ格’が度を超えてある状態にあり続けていることを表しているという点において互いに派生関係にある。中でも、意味1と意味2は、‘ガ格’が度を超えて‘V’をしていることを表しているという点において互いに緊密な派生関係にあり、意味3と意味6は、‘ガ格’が度を超えて‘V’終了により発生した状態にあり続けていることを表しているという点において互いに緊密な派生関係にあり、意味4と意味5は、‘ガ格’が‘ヲ格’を、度を超えてある状態にし続けていることを表しているという点において互いに緊密な派生関係にあり、意味6と意味7は、‘ガ格’が‘V’の主体により度を超えてある状態にされ続けていることを表しているという点において互いに緊密な派生関係にある。

また、ガ格対応型の意味4を表す文とヲ格対応型の意味6を表す文は、‘V’の主体が主役として描かれているか、‘V’の対象が主役として描かれているかという認知的意味のレベルでの相違点を除けば、知的意思のレベルでは同等の意味を有しており、このような点において、意味4と意味6は、互いに緊密な派生関係にある。

さらに、ガ格対応型の意味5を表す文とヲ格対応型の意味7を表す文も、
‘V’の主体が主役として描かれているか、‘V’の対象が主役として描かれて
いるかという認知的意味のレベルでの相違点を除けば、知的意味のレベル
では同等の意味を有しており、このような点において、意味5と意味7は、
互いに緊密な派生関係にある。

5. まとめと今後の課題

本稿においては、「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱ
なしだ」述語文の意味的相違を解明することを目的とした上で、両述語文の
意味構造について共時的な立場から分析を行い、両述語文に存在する多義的
別義が如何なるものであるのか、また、如何なる場合に両述語文が同じ知的
意味を有するのか、さらに、その際、如何なる認知的意味の差異が存在する
のかについて明かにしてきた。

しかしながら、これら二つの述語文の多義的別義が通時的に見てどのよう
に派生してきたのかについてまでは考察が及ばなかった。また、本稿におい
ては、「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述
語文の意味的相違を明かにすることを目的としていたので、これらの述語文
以外で、これらの述語文と比較的類似した意味を表す場合のある「動詞の連
用形+てある」述語文、及び、「動詞の連用形+ている」述語文との意味的相
違についてまでは言及できなかった。

今後は、本稿では扱えなかったこれらの点について、考察、言及を行う。
さらに、「まま」については、今回は、動詞の過去形に接続するものしかと
りあげなかったが、これ以外にも、動詞の基本形に接続する場合や「体言+
の」に接続する場合もあり、これらの用法が意味的に如何なる派生関係を
持っているのかという問題も興味深い問題である。このような問題について
も今後の研究課題とする。

参 考 文 献

- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 日本言語学会編『言語研究』15
工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』
ひつじ書房
国広哲弥 (1986) 「語義研究の問題点—多義語を中心として—」『日本語学』5-9明治書院
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
森山卓郎 (1984) 「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3-12明治書院